

## 【東京】「医師×僧侶」の二刀流で寺を拠点に在宅医療を展開-小笠原尚之・高輪往診クリニック長に聞く◆Vol.1

事故に遭った祖父の死や『白い巨塔』で医師への興味芽生える

2025年6月30日（月）配信 m3.com地域版

寺院を拠点に在宅医療を行う珍しいクリニックが東京都港区にある。2025年5月1日に開院した「高輪往診クリニック」があるのは、浄土真宗本願寺派「正源寺」の中だ。寺院の庫裏に診療スペースを設け、クリニックの運営を始めたのは、同寺で副住職を務める小笠原尚之氏。「お寺に生まれてなぜ医師に？」。率直な疑問を尋ねると、仏教の「縁起」を感じさせる複数のエピソードが聞かれた。「医師×僧侶」の二刀流の背景をたどった。（2025年5月27日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら



正源寺で合掌する小笠原尚之氏（本人提供）

### 小学1年時に祖父が交通事故、開業医の訪問診療を見る

——資料によると、小笠原先生はお寺の家に生まれたとあります。医師を目指した経緯をお聞かせください。

医師を目指した理由は複合的で、祖父の死や私が三男だったこと、高校生の頃に流行したテレビドラマの存在が関わります。

私は、島根県大田市にある浄土真宗本願寺派の西楽（さいらく）寺に三人兄弟の三男として生まれました。末っ子だったこともあり、当時の住職だった祖父からはとてもかわいがられました。祖父は昔気質の厳しい人でしたが、孫の私にはあふれんばかりの愛情を注いでくれて。一緒に庭いじりをしたり、『水戸黄門』を見たりと、幼少期のことは今でも覚えています。

そんな祖父が交通事故に遭ったのは、私が小学1年生の頃です。自転車で法要に向かっている最中にトラックと衝突して脳挫傷を負い、いわゆる植物状態となりました。数カ月にもわたる病院での療養を経て祖父は自宅へ帰り、それから両親が昼夜を問わず懸命に介護をしました。おむつの処理、たんの吸引、経管栄養の管理……。子どもながらにその苦勞を感じ取りました。

——その時、訪問診療をする医師の姿も見ていたそうですね。

そうです。当時はまだ今のように在宅医療が体系化されておらず、ケアマネジャーやホームヘルパー、訪問看護師などは関わっていなかったようですが、地域の開業医の先生が定期的に訪問してくれていました。優しい先生だったのだと思います。両親の頑張りを見たその方は2週間に1回の訪問を変更し、週に1回は来てくれていたようです。ぼんやりとですが、「家に来てくれるお医者さんもいるんだ」と医師の仕事の一端をこの時に知りました。

医師を志すようになったのは、高校2、3年の頃です。お寺は長男が住職を継ぐのが慣例なので、私は僧侶以外の道を探そうと考えました。その時にちょうど放映されていたのが、医療界の問題や人間の命の尊厳を描いたテレビドラマ『白い巨塔』です。対照的な医師2人がとても魅力的に表現されており、医師の仕事に関心を持った私は、過去に経験した祖父の死や、祖父と両親を支えてくれた開業医の先生の姿が頭に浮かびました。この作品をきっかけに、「寺の家系なのに医師になる」という、ちょっと変わった将来像への興味が高まっていったのです。

——医師であり僧侶でもある人は全国的にいますが、数は少ないと思います。先生の希望を聞いたご家族の反応はどうだったのでしょうか。

親族など周囲に医療関係者はいなかったため、意外に思ったかもしれないですね。長兄と次兄はともに仏教系の龍谷大学に進みましたし、私も同じ道をたどるものだと両親は思っていたようです。しかし、私が希望を伝えるとさほど驚いた様子はありませんでした。何か意見を言うでもなく、「どうぞ。頑張ってください」と見守ってくれて。2年間の浪人生活も許してくれ、2006年に久留米大学医学部に入学することができました。

## 野球部監督から誘いを受け、泌尿器科の道へ

——そして、同大を2012年に卒業し、先生は泌尿器科の道へ進みます。

泌尿器科を専門にしたのは、部活の監督が同科の先生（現久留米大学医学部泌尿器科学講座の名切信准教授）だったためです。医学部に入ったこと自体もそうですが、私は入学後もまた畑違いの野球部に入部しました。小学校から高校までずっと柔道を続けていたので、「大学でも柔道部に」と思っていたのですが、私より1年早く久留米大に行っていた高校時代の同級生（現島根大学医学部泌尿器科学講座の小川貢平先生）に誘われたんです。野球部の練習を見に行ったらそのまま乗せられてしまって。

結果的に、6年間の大学生活はひたすら野球に打ち込みました。久留米大学医学部準硬式野球部は当時けっこうな体育会系で、平日はほぼ毎日練習し、土日の多くは試合を行っていました。私は全くの素人で入部からの4年間は部内の底辺をはいつくばっているような感じでしたが、積み重ねが生きてきたのか、5年の頃にはファーストのレギュラーに定着しました。入部当初に「これは辞められる雰囲気じゃないな……」と思うこともありましたが、未経験のスポーツを6年継続し、自分のポジションを築けたのは自信になりました。

進む診療科については、医師家系でないこともあり、マイナー外科など少数精鋭で自分の存在感を発揮しやすいような分野をイメージしていました。「耳鼻科にするか、泌尿器科にするか」。そう迷っていた時に監督から勧誘され、初期研修の後に同大泌尿器科学講座に入局し、9年にわたって高度医療に携わりました。

## 在学中に僧籍を取得「さまざまなご縁と導きで今がある」

——他方、僧侶への道で進展はあったのでしょうか。

大学在学中に僧侶になるための手続き「得度（とくど）」を経て、僧籍を得ました。法名は「釋尚之（しゃく・しょうし）」です。この時はまさか「医師×僧侶」の二刀流として地域に関わっていくとは思いませんでした。振り返ると、祖父の死や医師になったこと、東京に住む妻との出会い、そして、在宅医療を自分が医師として経験したこと。「全ての存在は無数の因縁によって相互に関係している」——。仏教における「縁起」のように、私の人生もさまざまなご縁と導きがあり、現在に至っているのだと思います。

◆小笠原 尚之（おがさわら・なおゆき）氏

2012年久留米大学医学部卒。2014年同大泌尿器科学講座入局。2021年同大大学院修了。2023年に森島小児科内科クリニック（神奈川県川崎市）で在宅医療を経験し、2025年に自身が副住職を務める正源寺に「高輪往診クリニック」（東京都港区）を開院。「医師×僧侶」の二刀流で地域医療に携わる。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

